



# 営農情報

第122号 令和4年8月4日

## 「あまおう」8月の管理

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 現在の生育状況

#### (1) 子苗の生育

さしポットの鉢上げは、例年と同様に6月5～15日を中心に行われました。また、6月上中旬の気温が平年並みに推移したことから、活着は順調に進みました。

鉢上げ後、降雨が少なく(図1)、日照時間が多いことから、根傷みが少なく、順調に生育しているところが多くなっています。

苗の生育には個人間差が見られますが、全体的に、7月中旬の日照時間が少なかったため、徒長気味のところが多く見られます。また、一部、水持ちがよいポット培土を使用しているところでは、根傷み(輪斑病等)が見られました。

#### (2) 病害虫

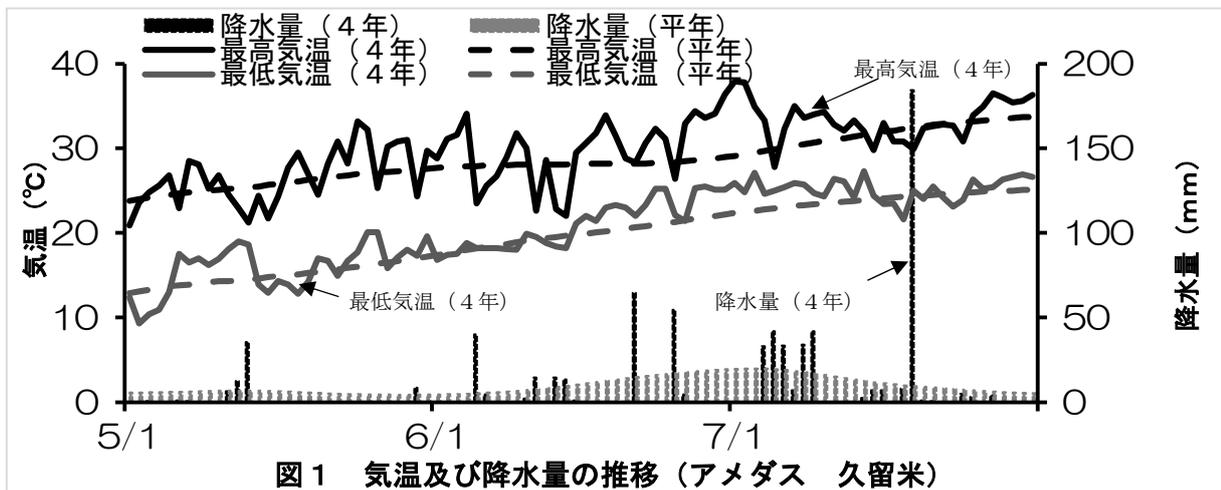
炭疽病は、親株では例年並みの発生でしたが、6月の降雨日が少なかったことや梅雨明けが6月28日と早かったことから苗での発生は少なく推移しました。しかし、6～7月の高温と7月18～19日の強い風雨により発生が急に拡大したところがあり、今後の注意が必要です。疫病は、親株では発生しましたが、現時点では子苗には見られていません。また、うどんこ病は6月には、散見されていましたが、7月下旬には上位葉での発病は認められません。

チバクロバネキノコバエについては、親株時から防除したところでは発生が抑えられており、昨年より被害が少ない状況です。カキノヒメヨコバイの発生は、7月上旬まで続きましたが、その後、減少しました。

また、温度が高いので薬害の発生が多く見られています。

### 【気象の経過】 (図1)

6月11日に梅雨入りし(平年より7日遅い)、6月28日に梅雨明けしました(平年より21日早い)。6～7月の気温は平年より高く推移し、7月の降水量は平年より多くなっています。



## 気象予報と今後の見通し

### 【今後の気象予報】

〔九州北部地方の1か月予報〕（予報期間：7月30日～8月29日 7月28日 福岡管区气象台発表）

○平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

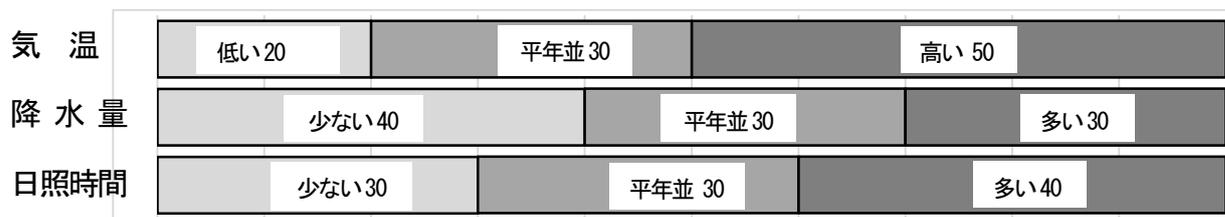


図2 九州北部地方における向こう1か月間の天候の見通し

### 気温の経過の確率

7/30～8/5	8/6～8/12	8/13～8/26
平年より低い確率 20%	平年より低い確率 20%	平年より低い確率 20%
平年並みの確率 30%	平年並みの確率 40%	平年並みの確率 40%
平年より高い確率 50%	平年より高い確率 40%	平年より高い確率 40%

平年より気温が高いと思われます。炭疽病の発生に好適な条件となることから、定期的な薬剤散布及び発病株の除去により発生拡大を防いでください。

8月中・下旬の気温が高いので、株冷処理で花芽分化しにくい状況が予想されます。寒冷紗を利用し、苗の温度を下げることに努めてください。また、体内窒素を随時調査して施肥し、入庫前の体内窒素を適切な濃度に調整してください。

### 8月の管理目標

- 子苗が肥料切れしないように管理し、クラウン径 10～12mm の大苗を育成する
- 育苗期後半には、イチゴの体内窒素をコントロールするとともに株冷施設や夜冷施設の温度を適切に管理し、目標とする時期に花芽を分化させる
- 定期的な薬剤散布により、炭疽病や疫病の発生を防ぎ、健全苗を育成する
- 炭疽病、疫病及び萎黄病を発病した株は見つけ次第処分し、発生拡大と本田への持ち込みを防ぐ
- 本田の土壌消毒や土づくり(堆肥の施用や排水対策)を行い、8月上旬までに定植床の準備を完了する

## 育苗管理

### 【 作型 】

表1 「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作型	入庫	出庫	定植予定日	陽光処理	収穫開始
株冷Ⅲ型	8月20日	9月12日	9月12日～	3回	11月上旬
株冷Ⅳ型	8月27日	9月15日	9月15日～	2回	11月中旬
	8月29日	9月17日	9月17日～	2回	11月中旬
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19日～	1回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日		11月上～中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日		11月中旬
普通ポット			9月20～25日		12月上～中旬
普通晩期（厳寒期安定出荷を目的）			9月26～28日		12月下旬

- クラウン径が10mm未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。

### 【 施肥 】

- 作型に応じて最終追肥時期（表2）を決め、計画的に施肥を行う。
- ポットが小型なほど、液肥の濃度をうすく、施肥間隔を短くし、肥料が切れすぎないようにする。
- 根傷みしている場合は追肥を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。

表2 液肥の最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
株冷Ⅲ型（8月20日入庫）	8月1日	8月5日
株冷Ⅳ型（8月27日入庫）	8月5日	8月10日
株冷Ⅴ型（9月1日入庫）	8月10日	8月15日
夜冷Ⅲ、Ⅳ型（8月中下旬処理開始）	処理10日前	処理5日前
普通ポット	8月25日	8月30日

### 【 かん水 】

- 少量多回数のかん水を心掛け（晴天日は1日に3～4回程度）、培土の乾き具合を観察して時間やかん水量を調節する。
- 8月は高温乾燥傾向が続くと予想されているので、鉢土の水分状況を観察し、苗が萎れないように注意する。

### 【 葉かぎ 】

- 花芽分化のために、低温処理開始前に葉が4枚必要である。
- 作型に応じて、最終葉かぎを行う（表3）。
- 1回当たりの摘除葉数は2枚以内とし、葉かぎ後は3.5枚程度となるようにする。
- 葉かぎ作業直後は、「炭疽病」の予防散布を必ず行う（傷口からの感染防止）。

表3 最終葉かぎ時期の目安と葉数

作 型	最終葉かぎ時期と葉かぎ後の葉数
株 冷	入庫10日前に3～3.5枚
夜 冷	処理開始10日前に3～3.5枚
普通ポット	8月25日に3～3.5枚

【 寒冷紗被覆 】

- 花芽分化しやすいよう、苗を寒冷紗で被覆し、昼間の苗の温度を下げる（表4）。

表4 各作型における寒冷紗被覆時期

作型	被覆する時期
株冷	株冷入庫 5～7日前
夜冷	処理期間中（ただし、日中35℃以上の高温になる場合）
普通ポット	8月下旬から

【 低温処理 】

冷蔵庫や夜冷庫には温度計を設置し、設定どおりの温度になっているか確認する。

○ 株冷処理

- 株冷処理の間に苗が消耗するため、クラウン径10mm以上の充実した苗を処理する。
- 昨年は、入庫前の体内窒素濃度が高く、順調に花芽分化しないところがあった。株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が25～50ppmになるよう、株冷入庫10日前に体内窒素濃度を測定し、濃度に応じて肥培管理をする。（表5）
- 株冷開始後2～3日間は10℃で管理し、その後、出庫まで15～16℃で管理する。
- 冷蔵庫内の湿度が90%以上になるように湿度管理に注意する。
- 株に冷風が直接当たらないようダンボールや厚紙で風よけをする。

表5 株冷入庫10日前の体内窒素濃度に応じた管理

体内窒素濃度	対策
25ppm以下	葉面散布2回（OKF-1 1000倍、メリット青 500倍など）
25～100ppm	葉面散布1回（OKF-1 1000倍、メリット青 500倍など）
100～250ppm	かん水のみ
250～500ppm	PK剤の葉面散布1～2回 入庫2～3日前に100ppm以下になっているか再調査する
500ppm以上	入庫せず、遅い作型に変更する

● 陽光処理

- ① 株例処理期間中の株の消耗を抑えるため、晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。
- ② 入庫10日前後に1回目を行い、その後2～3日間隔で計3回程度行う。
- ③ 陽光処理時間は1日8時間以内とし、乾燥しないようかん水を行い、株の温度が下がった夕方（午後6時頃）再入庫する。（冷蔵庫内の温度上昇・蒸れを防ぐため）
- ④ 陽光処理時に炭疽病等の防除を行う。

○ 夜冷処理

- 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時は150ppm程度の体内窒素を確保する。
- 入庫時の庫内温度は13℃±2℃とする。
- 入出庫時間の目安は、午前10時に出庫、午後6時に入庫とする。
- 気温が高い場合、入庫時刻が早いと庫内の温度が下がりにくいいため、入庫時刻を遅くする。（8時間日長を基本とするが、10時間以下であれば問題は生じていない）
- 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行うが、摘葉はしない。

病害虫防除

- 本田にハダニ類、うどんこ病及び炭疽病を持ち込まないために、早期作型では低温処理直前（最終葉かぎ後）の防除を徹底し、これらの病害虫が類が発生している株は入庫しない。

- 薬剤散布は早朝、もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時やポット土が乾燥しているときには葉害が発生しやすい）。夕方でも葉温が高い場合には、事前に葉水程度の少量散水を行い、葉温を下げてから薬剤を散布する。

### 【炭疽病】

- 7月18～19日の強い風雨により拡大している恐れがある。
- 1週間間隔での定期的な予防散布を徹底する。
- 常に育苗床をよく観察し、葉身に汚斑（うす墨を付けたような病斑）や葉柄に病斑（写真1）が見られる苗は育苗床の外へ持ち出し処分する（発病株を中心に1m範囲）。
- 葉かぎ後やまとまった降雨の前は必ず薬剤防除を行う。
- 台風前後には、必ず薬剤防除を行う。



写真1 炭疽病の病斑(左:葉身の汚斑、右 葉柄の病斑)

### 【疫病】

- 疫病は、土壌伝染と水媒伝染をし、発病株に形成された遊走子のうから放出される遊走子により伝染する。（病原菌が水中を移動する）
- 梅雨時期～9月の高温多雨期に、降雨やかん水により感染が広がる。定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除を徹底する。（かん注剤の効果が高い）
- 発病株と周辺の株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 土壌伝染性の病害であり、前年発病したほ場では再発の恐れがあるので、必ず土壌消毒を行う。

### 【萎黄病】

トピックス参照

### 【ハダニ類】

- 葉裏に葉液が付着するよう十分量（60～100リットル/6000株）を散布する。  
※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に長期間影響する農薬の使用を避ける。
- モベントフロアブルのかん注
  - ①かん注時期 株冷作型・・・入庫直前  
普通ポット・夜冷作型・・・定植3日前～定植当日  
(ポットにかん注して長期間置いておくと葉害が発生するおそれがある)
  - ②カブリダニ類を使用する場合 かん注から天敵導入まで35日以上あける

### 【チバクロバネキノコバエ】

- 堆肥を堆積する場合は、ビニルをベタ張りする等して、本虫が産卵できないようにする。
- 育苗床周辺に廃棄苗等や草刈りした雑草を放置しない。

### 【コガネムシ類幼虫】

- 幼虫の発生・根の食害は8月上旬から始まる。
- 防除剤（ダイアジノンS Lゾル 500倍）を未処理のところは、早めに処理する。

## 【ハスモンヨトウ】

- ほ場内や周辺の雑草はハスモンヨトウの増殖の場となるので除草を徹底する。
- 若齢幼虫が群生している葉（かすり状に食害された葉）は、除去してほ場外に持ち出す。
- 中老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫（卵がかえって7日間程度、体長 1.5cm くらいまで）のうちに防除を徹底する。
- 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、同じ系統の殺虫剤の連用を避ける。

## 本田

例年、8月中旬以降には降雨日が多い、8月上旬までに定植床の準備を終わらせておく。

## 【うね立て】

- 根が張るスペースを確保し排水性を高めるため、高さ 20～25cm 程度が望ましい。
- 耕うん時の適切な土壌水分は、耕起後に土を握ると固まり、はなすと 3～4 個に割れる程度とする。
- うね立て後は古ビニルでべた掛けする。

## 台風・大雨対策

### 【事前対策】

- ビニルや寒冷紗で被覆している育苗床は、ビニルや寒冷紗を取り外し倒壊を防ぐ。
- 育苗床周囲の飛散物を撤去する。
- 移動可能な機械類（動噴や炭酸ガス発生装置等）は浸水しないように安全な場所に移す。また、加温機は倒伏しないように固定するとともに煙突を片づける。
- オイルタンクの元栓は閉めて、本体が倒伏しないように十分固定する。
- 陽熱消毒中のパイプハウスは被覆ビニルを剥ぎ、地表面の被覆ビニルは飛ばされないように固定する。うね立て後のべた掛けビニルも同様に対応する。
- 育苗床のかん水チューブの破損等が予想される場合は、取り外して片付けておく。
- 苗は、コンテナに入れて安全な場所へ移動するか、寒冷紗等で被覆し四方を押さえる。
- 棚育苗床では架台を補強する。また、株の損傷を少なくするため架台全体を、寒冷紗等で囲み固定する。
- 地床育苗では、育苗床の周囲にあらかじめ、排水溝を設置しておく。
- 停電によりポンプが作動しない恐れもあるため、事前に水やエンジンポンプを用意する。

### 【事後対策】

- 苗を被覆していた寒冷紗等は、台風通過後、速やかに除去する。
- 苗が浸・冠水した場合には、次の対策をとる。
  - ・速やかに排水する。
  - ・茎葉に付着した泥が乾かないうちに、洗い流した後、殺菌剤を散布する。
  - ・浸・冠水すると炭疽病や疫病が蔓延しやすくなるので、重点的に防除する。
  - ・酸素発生剤や発根促進剤を施用する。
- 潮風で作物に付着した塩分は、十分量の真水で洗い流す。
- 停電が長時間が及ぶ場合には、自家株冷中の苗は苗傷みをさけるため、冷蔵庫外に出して広げる
- 浸・冠水しなかった場合にも台風後には炭疽病及び疫病の防除剤を散布する。

## トピックス 「萎黄病対策の基本は育苗期間中の観察と土壤消毒」

令和3年産では、本田で萎黄病の発生が多く見られました。萎黄病はイチゴ経営にとって最も厄介な病害の一つで、多発すると経営に大きな打撃をもたらします。本病菌は長く土壤中で生存し、株や汚染土で伝染することから対策を怠ると感染が拡大します。対策を徹底し発生を抑えてください。

### 1 病徴 (写真2)

- 次第に生育不良になり、葉は小葉の1～2片が小型化やねじれなど奇形化する。
- 奇形葉は片寄って発生し、葉は黄変わい化し、甚だしくなると枯死する。
- クラウンを切断すると導管部が褐変している。



写真2 萎黄病の病徴

### 2 萎黄病の性質

- 萎黄病は温度が高い時期に発病しやすい。
- 土壤伝染と苗伝染(潜在感染)によって広がる。(図3)
- 本病が発生した本田にイチゴを連作すると被害が拡大する。
- 土壤中の萎黄病菌はイチゴが作付けされない状態でも4～5年以上生存する。

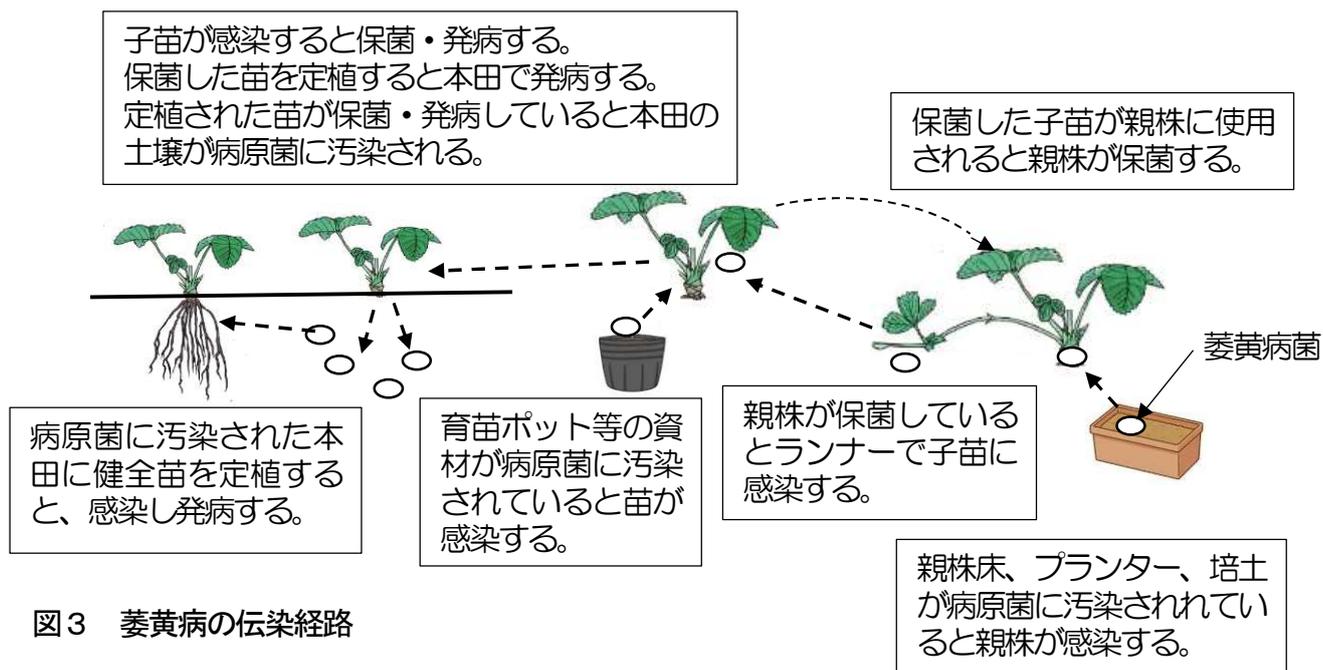


図3 萎黄病の伝染経路

### 3 防除対策

- 無病 (保菌していない) 苗を使用する。
- ◎育苗期間中に苗をよく観察し、萎黄病が認められた場合には、苗、親株を更新する。
- 本田で発病株を見つけた場合には、早急に取り除き、ハウス外に持ち出して処分する。
- 除去した株は、肥料袋などに密閉して嫌気発酵処理するか、またはほ場から離れた場所に深く埋めるなど適切に処理する。
- 病原菌に汚染されていない親株床、プランター及び本田に植えつける。
- 発病が認められた場合には、親株床、親株用育苗培土を更新し、プランター、育苗ポット等は、更新するか丁寧に水洗いしてケミクロンGで消毒する。
- ◎育苗床及び本田で発病が認められた場合には、本田は必ず土壤消毒する。
- 他の生産者の育苗床やハウスへの行き来の際には、靴を変える。

# 防除器具は使用後には必ず洗いましょう！ 併せて器具の点検も

農薬使用後の防除器具の洗浄が不十分であると思わぬ形で農薬事故を招くことがあります。使用後は、器具に農薬が残らないように速やかに洗いましょう。他の作物と防除器具を共用している方は特に注意してください。また、洗浄時にストレーナやノズルを点検しましょう。

## 1 農薬が残りやすいところ

散布ホース内  
長さ 100m、内径 10mm の  
ホースの容量は約8リットル



ストレーナ  
農薬の残りカスが付着  
しやすい



薬液タンク  
タンクの底に農薬が残  
りやすい



## 2 防除器具の洗浄の手順

- (1) 洗浄用のきれいな水を十分に用意する。
- (2) 洗浄用の水を入れた容器に吸水口側のホースを入れる。
- (3) 余水（戻り水）側のホースは洗浄用の水を入れた容器には入れない。
- (4) 散布ホースの先のノズルを外す。
- (5) 防除器具を作動させて、ポンプ、散布ホース内に十分な量の水を通す。  
※散布ホースの容量より多い水を通すこと
- (6) コックを操作し、余水口側のホース内も水を通す。
- (7) タンクやノズルも十分に洗浄する。ストレーナはブラシを使って洗浄する。

**器具の洗浄によって出た汚水が河川やクレークに流れ込まないように注意しましょう**

## 3 器具の点検

- (1) 古くなって傷んだホースやストレーナは交換する
- (2) ノズルの穴が大きくなって、細かな霧が出なくなっていればノズルを交換する

**農薬のラベルには使用基準が明記されています。必ず基準を守ってください**

- イチゴに使用できる農薬であるか確認しましょう。
- 定められた希釈倍数より濃い濃度で使用してはいけません。
- 定められた時期以外に使用してはいけません。
- 定められた使用回数より多く使用してはいけません。育苗期、本ぽごとに回数が決められているものもあります。また、成分ごとの使用回数を超えないように注意しなければなりません。
- 使用方法が定められています。常温煙霧機で使用できる農薬は、使用方法欄に「常温煙霧」と表示されている薬剤のみです。
- 注意喚起マークが表示されている場合には、安全確保のため必ず守りましょう。

本資料中の農薬に関する記述は令和4年8月1日現在の登録内容に基づいています。